

**目次**

- 1. 事務局より
- 2. 前年度編集責任者より
- 3. 新編集委員より
- 4. 本年度編集責任者より
- 5. 追悼：佐藤正明先生
- 6. 運営・企画担当より
- 7. 2011年度例会予定
- 8. 研究会だより
- 9. 留学に関する情報
- 10. 「海外雑誌論文目録」廃止と海外雑誌リンクのHP上掲載について
- 11. 収支決算報告
- 12. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
- 13. 編集後記

**1. 事務局より**

大阪大学言語文化研究科が事務局を勤めるのも、3年目に入りました。連絡先に変更ありませんが、念のため以下に記しておきます。入会希望の方々その他事務局に連絡する必要がある場合は、大阪大学の以下のアドレスをお願いします。

〒560-0043 豊中市待兼山町1-8  
 大阪大学言語文化研究科フランス語資料室内  
 日本フランス語学会事務局  
 e-mail : belf-bureau@lang.osaka-u.ac.jp

以前に春の仏文学会開催時に行っていたシンポジウム会場での、会費の直接徴収と当該年度の『フランス語学研究』の配布は行っていません。会費の徴収は基本的に郵便振替で行っています。会費は『フランス語学研究』に同封します振り込み用紙で速やかに払っていただくようお願いいたします。3年以上の会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

学会誌『フランス語学研究』の発送は現在、業者に依頼して発送していますが、特に昨年度、学会誌が届いていない旨の問い合わせが何件ありました。昨年度は印刷業者を通して佐川急便を利用したのですが、住所不明その他の理由で戻ってきた配達不能だった発送分を確認しようとしたところ、返送されたものの所在が不明であることが判明しました。非常に不可解な事態だったのですが、どうしようもなく、会員ご本人からの問い合わせがないと配達されていないことが分からない状況です。もしも学会

誌が不達である場合や周りにそのような方がおられた場合は、事務局まで申し出ていただきますようお願いいたします。今年度はこのようなことがないように、発送業者を変え、万が一返送された分がある場合はそれを把握できる体制であることを業者に確認しておくようにします。

**◆学会誌のアーカイブ化について**

現在、学術雑誌の本体そのものやバックナンバーを電子化するというのが大きな流れになっていますが、『フランス語学研究』44号でお知らせしましたように、日本フランス語学会でも『フランス語学研究』のバックナンバーを電子アーカイブ化することになりました。そうすることにより、電子化したファイルをインターネットを利用して広く一般公開し、より手軽に多くの方がバックナンバーに掲載されている論文や情報を利用することができるようになります。フランス語学研究の普及に役立てることができそうです。最新号および過去3年分のバックナンバーはインターネット上での閲覧を制限しますが、それ以前のものとは無料で閲覧およびダウンロードできるようにする予定です。

大学間の持ち回りで事務局を運営している当学会にとっては、紙媒体の印刷物であるバックナンバーを事務局で保管することも大きな負担になっていましたが、電子アーカイブ化することでその負担も大幅に軽減することができます。

この電子アーカイブ化に先立ち、著作物の権利関係を明確にする必要があり、2010年3月に「日本フランス語学会著作物取り扱い規程」(44号参照)を定めました。この規程は『フランス語学研究』45号(2011年)より適用され、同号およびそれ以降の号に投稿される方は、この規程を了承したものとさせていただきます。それ以前の、44号(2010年)までに論文等が掲載された方々については、その著作物にこの規程を遡って適用することを認めていただくべく、規定の適応にあたって異議がある場合は2011年2月末日までに本学会事務局宛に郵便または電子メールで申し出ていただくよう呼びかけおりましたが、期日までに異議の申し出はありませんでした。その結果を受けて、今後、事務局の方で、国立情報学研究所電子図書館事業を通じて、『フランス語学研究』のバックナンバーの電子アーカイブ化による一般公開の手続きを進めていきます。

## 2. 前年度編集責任者より

3月6日：ルーティンの「第三回編集委員会」と原稿割り付けの作業、印刷所への入稿が無事終了。学会誌発刊までしばらくはゆっくりできるかなと思っていただところだった。3月11日：「東北地方太平洋沖地震」（その後「東日本大震災」と名称が変更）が起きた。以後、被災のとてつもない規模が日々明らかになり、蟻が荷物を運ぶような復興の中、先行きが不透明なまま今日（4月29日）まで暗澹とした日々が続いている。なにごとについて同じことだが、地道な作業と叡智が必要とされる。これから何十年かかるともしれない日本の再建は、幕末期や第二次大戦後にも比すべき歴史的転換点になることだけは間違いない。

そんな中で、学会誌編集業務を淡々と行い、今現在、校正も二校完了までたどり着きました（三校が最終）。学会誌をここまで支えてきた人々が確立してきたノーハウとチームワークの賜物と感謝しています。『フランス語学研究』の編集責任者は毎年変わりますが、仕事のシステムの蓄積のおかげで、編集責任のストレスがあまり積もることもなく毎回新たなスタートが切れるわけです。ここまでほぼ支障なく今年度の責任をまっとうできたかと思えます。「ほぼ」と言えるのも、30代から60代に至る27名の編集委員のサポートがあったからに他なりません。対処に困ったり、問題が生じたりした際には「打てば響く」ような感じで助言をもらうことがしばしばでした。相互扶助の精神がこれからもこの学会を支えていくことを確信しています。

『編集後記』にも書いた通り、本年度の主な変更点は「海外雑誌論文目録」の掲載中止（代わりにHPへリンクを貼る）とバックナンバーの電子アーカイブ化（3年以前の雑誌記事がウェブ上で読めるようになる）という方向で作業を進めた点です。徐々に、しかし確実に実行しますので、結果が出るまでもう少しご辛抱下さい。

電腦空間がいかに発展したとはいえ、年8回行われている例会での発表を充実させ、対面での議論の活性化、切磋琢磨、生きた情報交換と人的交流を図ることがやはり研究には第一でしょう。本誌45号には、若手研究者の力作論文が4本掲載されています。また、世代や分野の垣根を超えた議論（シンポジウム、談話会）の痕跡を読み取ることもできます。編集委員会では、若手研究者中心の *journee* を開催したらどうかという提案もありました。書かれたものの背後には、個人の日々の研鑽ばかりでなく他者との交流があります。本誌の歴史に透けてみえる本学会の開かれた雰囲気は貴重な財産であり、研究の受容と解釈（論評）、海外の潮流の紹介（海外報告）、

地道な情報提供（新刊紹介）、時間をかけて熟した考察（フランス語質問箱）などが毎号続いていくことを強く願っています。

最後にもう一点。「フランス語研究促進プログラム」は、『言葉で/遊ぶ』が44号別冊として昨年刊行されました。これに続くプロジェクトが期待されます。（小熊和郎）

## 3. 新編集委員より

今年度は守田貴弘さんが新任の編集委員として加わってくださいました。

### ◆守田貴弘（東京大学）

学部では日本語教育を専門にしながら、趣味のような形で細々とフランス語の勉強を続けていました。大学院から認知言語学の枠組みでフランス語を扱うようになったものの、機能的類型論に興味があり、言語相対性仮説に挑みたいという気持ちも抑え難く、今もって「フランス語学が専門だ」と言いきることにためらいがあります。フランス語を専門としているつもりでも、いつも他流試合に臨んでいるような感覚が抜けません。

留学を終えて帰国してからは、幸運にもPD研究員に採用してもらえましたが、所属先は哲学のグローバルCOE。さらなる他流地合です。言語学的前提を共有していない人間を相手に自分の考えていることを伝え、そして言語学とはおよそ関係のない話題に言語学者としてコメントする。フランス語学者としては回り道以外の何物でもないと思いますが、言語学という学問を信用していない人たちと共に過ごした時間は、自分にとっては2つの意味で貴重なものでした。1つは、純粋に勉強になることが多かったということです。同年代の研究者から文学、現象学や科学哲学について教えられ、知識の量も少しは増えたのではないかという気がしています。

もう1つは、自分の立場自体を問う姿勢が身についたということです。言語はおよそ人文系の学問であればどこでも問題になります。しかしその問われ方は分野によって異なり、分野間で積極的な交渉があるわけでもありません。かつて「言語学は科学なのだ」と誇らしげに言う人を見て多少の違和感を覚えることはあっても、これといった反論はできませんでした。今では、科学であろうとすることによって失ったものも多く、その失われたものにも敏感になるべきだと考えるようになってきました。言語をめぐるアプローチの溝を埋めていかない限り、言語学はマイナーな学問になってしまうのではないかとこの危機感もあります。ましてや、今となっては日本の教育界でマイナー言語に数えられるようになった

フランス語です。「武士は食わねど」といった態度を貫くのではなく、マイノリティの自覚を持って、他分野、他言語との交流に打って出る必要があるのかもしれない。

幸い、最近のフランス語学会では分析哲学のような発表をする人や、他言語の研究で使われている理論的枠組みを使った発表をする人が増えているように見えます。少しずつではあるけれど、フランス語を専門としていない人も聞きに来てくれるようになってきました。さらに開かれた場にするために、回り道をしてきた異端ならではの役割もあるのではないかと、編集委員になるにあたって自らに問いかけています。

#### 4. 本年度編集責任者より

『フランス語学研究』46号(2012 予定)の編集責任をお引き受けすることになりました。じつは自分が研究者であると思ったことのない人間です。とはいえ、フランス語の学生そして教員として永年にわたって例会・シンポジウムその他の催しや『フランス語学研究』から計り知れない恩恵を受けてきたことは間違いありません。また、いろいろな催しや編集委員会で接した方たちの知性・学識に感嘆し人間的魅力にひきつけられたことも二度や三度ではありません。そういう深いつながりのあるフランス語学会ですから、機関車としては旧式でくたびれていて牽引力がないことが分かっているながら、少しは責任を担わなければと覚悟をきめた次第です。編集委員の皆さんに助けていただきながら最善を尽くすつもりですので、会員の皆さんもよろしくご協力のほどお願いいたします。

これを書いているのは四月下旬ですが、大震災このかた厳しい毎日を強いられている会員の方々のことを思うにつけ、伸びやかな気持ちで学会活動をしそう盛りたてていく姿勢が大事ではないかという気がします。「被災地の外には自分たちの要請に応えてくれる活気に満ちた豊かな世界がある」と感じることは、被災者にとって心強いことでしょう。幸い、私たちの学会は活動全般について議論する編集委員会がうまく機能していて財務状態も健全ですから、これからも活発に活動していける体制が整っています。これまでの蓄積の上にさらに斬新な研究活動を展開していくよう努めるとともに、ことばについて考える喜びを共にできる人(とくに若い人)がもっと増えるようにする方策を探っていきたいと個人的には考えています。

いうまでもなく『フランス語学研究』は会員のもので、多くの先人の努力によって高く評価される研究誌となっていますが、なお良いものにしていく

ために皆さんのご希望・ご意見をお寄せいただければ幸いです。  
(曾我祐典)

#### 5. 追悼：佐藤正明先生

長年、編集委員としてご尽力くださり、福岡大学では学会事務局をお引きいただくなど、当学会に多大のご協力をたまわりました佐藤正明先生が、2010年6月7日、逝去なさいました。この欄では、生前の佐藤先生をよくご存知だったお二方に筆をとっていただきました。

#### ◆仙台の頃の佐藤正明さん

正明さんと初めて会ったのは東北大学の仏文科で院生をしていた1977年の頃だ。仏語学の佐藤房吉先生が教養部にいらしたことが幸いし、私は仏語学で修論を書いた。房吉先生の講義、東大駒場でのフランス語学会例会、その後のビール会が私の勉強の場だった。

数年して正明さんが仏文科の修士課程に入ってきた。正明さんは当初理学部の数学科に入学、翌年文学部社会学科に再入学。その後アテネ・フランセの松本悦治先生のもとで助手をつとめてから復学した。だから正明さんが仏語学を志したときは30才が間近だったはずだ。社会学の卒論を書きながら仏文修士課程への入学を準備したという。「数年間は勉学に集中できる蓄えをもって復学した」「長い彷徨をへて進むべき道に出会った。一刻も無駄にできない」、そう言っていた。用意周到で、人に細かく気をつかい、温厚で丁寧、そして強い意志を感じさせる人柄だった。

その後、房吉先生が筑波大学に移られ、大木健先生が仏語学の授業を引き継がれた。正明さんと私は大木先生の研究室におじゃまし、Guillaume や Moignetなどを輪読した。二人とも上智大に場を移した語学会例会によく通った。当時は木下光一先生が運営役、泉邦寿さんが事務局、朝倉季雄先生、三宅徳嘉先生をはじめ錚々たる先生方が参加し、ビール会では後進にわけ隔なく接して下さった。楽しかったし多くのことを学ぶことができた。

正明さんは仏語動詞の時制体系について修論をまとめ、直ちに東北大文学部の助手、そして教養部の専任講師になった。動詞時制の研究を生涯のテーマとしていくつものすぐれた論文を発表した。恩師である房吉先生と大木先生との共著で『詳解フランス文典』(駿河台出版社)もまとめた。輝かしい業績だ。

1981年私は東京に移り正明さんとお話する機会は減ってしまった。ひとつだけ思い出すことがある。古川直世さんが主催する仏語学の軽井沢合宿からの帰り道だった。方向が違うのでお別れしたらまもな

く正明さんが戻ってきて、「藤田さん、僕はいまでも幸せです」と言った。1980年代の終わり頃だ。どんなやりとりだったか、もうよく覚えていないがその言葉だけは忘れられない。

昨年6月7日、正明さんが亡くなったという知らせを受けたときは信じられなかった。還暦をすぎたばかりなのに足早やに駆けぬけていった正明さん。心からご冥福をお祈りいたします。(藤田知子)

#### ◆佐藤正明先生のこと

佐藤正明先生は、長く教鞭をとられていた東北大学文学部を辞され、平成12年4月に福岡大学文学部フランス語学科に赴任されました。以後、お亡くなりになる平成22年6月の前の月まで、同大学で授業をされていました。

わたしが佐藤先生の同僚であったのは、6年と少しのごく短い期間に過ぎません。突然の訃報に接して、驚き、悲しみを感じると同時に、この6年という時間の短さに呆然としてしまったことを憶えています。佐藤先生とお酒を呑んだり、お話をうかがう時間がまだまだあると思っていました。

研究者そして教育者としての佐藤先生については、フランス語学会の皆様がいまさら紹介の必要はないと思いますので、福岡大学に来られてからはとくに複合過去や近接過去の研究に時間を割いておられたと言うだけにしておきます。以下は、先生の福岡での日常のご様子について、紙面の許す限りで、いくつかお伝えしたいと思います。

佐藤先生は、学生さん思いの、優しい先生でした。学生さんや後輩をご自宅に招いてくださったり、お店で御馳走してくださったりすることを好まれました。若い人を励ましたい、喜ばせてあげたいというお気持ちを強く持たれていたようです。学生さんが質問のために研究室を訪ねると、必ずお茶とお菓子(とくに干し柿)をすすめてくださったそうです。また、お亡くなりになる直前には、病床でのうわ言に、学生さんの出席をとられることもあったそうです。

佐藤先生に当初、わたしは求道者的で書齋派の学者イメージを持っていたのですが(このイメージは必ずしも間違っていないと思いますけれど)、実際の先生は意外なほどスポーツマンで、週に何回かの水泳(しかも遠泳)を習慣にされていたようです。学生さんたちが「佐藤先生って、意外にスタイルがいいよね」と話しているのを聞いたこともありました。水泳といえば、ご出身地の酒田では海のすぐ近くに住んでおられて、子供の頃によく海で遊んだというお話を、とても懐かしそうにされていました。

最後に、佐藤先生が共著者のお一人である『詳解フランス文典』(駿河台出版社)を紹介します。先生の労作の一つです。有名な文献ですので皆様ご存知

かとは思いますが、未見の方は、いつか是非読まれてみてください。

佐藤先生に、心より哀悼の意を表します。

(川島浩一郎)

#### 6. 運営・企画担当より

「人生も、世界も、確かにつらいことばかりです。『どうしてこんなことが起きなければならないのだろう。』無意味な問いだと知りつつ、思わずそう問いたくなる悲しい出来事が起き、そのたびに無力感に苛まれます。」

これは昨年のニューズレターに私が書いた文章です。それから1年経った今、この無意味な問いを繰り返し問い、かつてないほどの無力感に苛まれる日々が続いています。

千年に一度と言われる大災害を前にして、言語学者に何ができるでしょうか。何もできないでしょう。「学問は人の心を豊かにする。」そんなことを言っても、空しいだけです。今まさに命や健康を奪われようとしている人たちに言語学の本を読んで聞かせて、何が豊かになるでしょうか。「こういう状況になって、自分の無力さを感じる。」そんなことを思う言語学者もいるかもしれません。私はそういう人に言いたくなります。「そんなことも分からずに言語学者になったのですか?」言語学が人命救助に役立たないことは、災害が起きる前から分かっていたことで、災害が起きて初めて分かるというのでは、鈍感の誹りは免れないでしょう。

一つだけ言えるのは、人命を救助できるかどうかという尺度で言語学(者)の価値を測るのは、たとえばパンを作れるかどうかという尺度で消防(士)の価値を測るのと同じくらい、誤りだということです。他人が悲しんでいるときに、悲しみを共有しようとする。他人が困っているときに、できる限りの手助けをする。これは当然です。しかし、「千年に一度の大災害で多くの人が困っているときに、言語学なんかやっけていいのだろうか」と自分を(ましてや他人を)責めるとなると、話は別です。言語学に価値がなくなるのは、定義上、この世界から言語がなくなる時だけです。そして、言語がなくなれば、「言語学には価値がない」と語ることもできなくなります。逆に言うと、「言語学には価値がない」と語れるうちは、言語学には価値があるのです。大災害の前も、後も、言語学には価値があるのです。

「千年に一度の大災害で多くの人が困っているときに、言語学なんかやっけていいのだろうか」という思いは、いったい誰の何を責めているのか、おそらく言っている本人すら分かっていないような空虚な思いにすぎません。他の条件が同じならば、「研究

を放棄した研究者」より「研究を続ける研究者」の方がよいというのは、ほとんど言葉の定義の問題でしょう。「パン作りを放棄したパン屋」よりは「パン作りを続けるパン屋」の方がよいに決まっています。大災害の前に大事だったものは、大災害の後も大事です。人命救助に役立たなくても、大事なものは大事なままなのです。

これに対しては「大災害の前と後（特に直後）で、はたして言語学にまったく同じ価値があるのか？」と問われるかもしれません。これには「そこまでは分からない」と答えるしかありません。価値はいくら減るかもしれないが、価値はある。それだけ確認して、冒頭に掲げた昨年のニューズレターからの引用箇所の続きの一文を引用します。

「しかし、ただでさえつらい人生を、自分の手で余計つらくすることはありません。」

だから、言語学者はこれまでどおり言語学を続けるべきです。私は読者の皆さんに説教をしたいのではありません。私は、この文章を皆さんに読んでもらうことによって、無力感に苛まれる自分自身を鼓舞したいのです。私が無力感に苛まれることで幸せになる人は間違いなく一人もいないからです。自分を無力感から救い出す哲学としての言語学。私はこの技術を手に入れることを目指したいと思います。そのような哲学としての言語学は、死にゆく人を誰一人救うことができなくても、生きている他人を誰一人幸せにすることができなくても、生きている自分を救うことくらいはできるのです。何もできないよりは、ましです。

さまざまな思いを抱いた研究者と例会でお目にかかりたいと思います。

(酒井 智宏, 2011年3月26日記)

(2) 田原 いずみ (明治学院大学)

「題目未定」

司会: 未定

◆第273回例会 7月(日時詳細未定)

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス 教室未定

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会: 未定

◆第274回例会 9月24日(土) 15:00-18:00

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス 教室未定

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会: 未定

◆第275回例会 10月22日(土) 15:00-18:00

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス 教室未定

(1) 津田 洋子 (京都大学大学院)

「題目未定」

(2) 治山 純子 (東京国際大学非常勤)

「題目未定」

司会: 未定

◆第276回例会 11月13日(日) 時間未定

会場: 未定 (関西)

(1) 福田 由美子 (関西学院大学大学院)

「題目未定」

(2) 発表者未定

司会: 未定

◆第277回例会 12月3日(土) 15:00-18:00

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス 教室未定

(1) 新谷 真由 (筑波大学特任研究員)

「題目未定」

(2) 春木 仁孝 (大阪大学)

「フランス語の認知モードについて」(仮題)

司会: 未定

## 7. 2011年度例会予定

以下は4月30日現在の情報です。最新情報は、学会ホームページで随時更新されております。

◆第271回例会 5月27日(金) 15:00-17:00

会場: 東京大学駒場 I キャンパス 10号館 3階 301

会議室(※ 会場が他の月と異なります。ご注意ください。)

(1) 山本 香理 (関西学院大学大学院研究員)

「aimer の直接目的補語位置に置かれた comment 節の機能」

司会: 守田 貴弘 (東京大学)

◆第272回例会 6月25日(土) 15:00-18:00

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス 教室未定

(1) 杉山 香織 (東京外国語大学大学院)

「題目未定」

## 8. 研究会だより

昨年度は、残念ながら関東での定例的な研究会は実施されませんでした。今後、従来とは違った形の研究会の実施が検討されております。

### ◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。毎月、後半の土曜日に1回開催したいと考えていますが、なかなかそのとおりになっていません。皆さんの御協力を御願います。時間は、原則として、午後2時から5時です。昨年度の発表は以下の通りです。

6月

福島祥行「発話の協働構築—理論と分析—」

10月

山本香理「目的補語位置に置かれた *quand* 節の機能」

山本大地「情形容詞 (*adjectif affectif*) *fichu* の意味について」

12月

津田洋子「*IL Y A* と *VOILA* の談話機能—出来事の発生を伝える *IL Y A/VOILA* 「名詞句＋関係節」において—」

3月

三藤博「条件文の日仏語対照研究—*si factuel* を中心に—」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。昨年は4回しか開けませんでした、アットホームな雰囲気の集まりですので学生の方も遠慮せずにご参加ください。

案内はメーリングリスト *Frenchling* のみで行っていますが、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹 : [hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp](mailto:hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp)

大久保朝憲 : [tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp](mailto:tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp)

(平塚 徹)

## 9. 留学に関する情報

今回は、プロヴァンス大学に留学なさった山本香理さん、パリ第13大学に留学中の宮川宗之さんに執筆していただきました。

◆山本香理（関西学院大学大学院文学研究科研究員）

私は2009–2010年にかけて、エクス-マルセイユ第一大学（*Aix-Marseille 1*）文学部フランス語学科 *Master 2* に在籍しました。今日は、留学までの流れと、大学生活について述べたいと思います。

私の研究テーマは、フランス語の話し言葉における接続詞の使用と機能です。この問題について優れた研究を数多く発表しているプロヴァンス大学で学びたいと長い間考えていました。正式に留学が決まると、プロヴァンス大学の研究チーム *Delic* の佐野敦至先生（福島大学）に *H.-J. Deulofeu* 先生を紹介していただきました。先生のご指導のもと、「マクロ統語論」や「話し言葉とは」について学び、修士

論文を提出しました。

*Master 2* では、言語学のゼミを二つ、文学の授業を一つ履修し、修士論文を提出します。私は、フランス語学科の統語論のゼミと一般言語学学科の類型論のゼミに登録しました。講義は担当教官が三人のリレー形式のものでした。統語論のゼミでは、マクロ統語論の基礎概念についての講義から、先生方が研究を進めていらっしゃる問題まで多岐にわたる話題が扱われました。昨年逝去された *C. Blanche-Benveniste* 先生が発展させてこられた *verbe recteur fort / faible* という概念についての講義が最も印象に残ったものの一つです。また、他大学の研究者と共同でシンポジウムが行われました。例えば、*Lyon* で開催されたシンポジウム « *Début d'énoncé, début de tour et projection* » ([icar.univ-lyon2.fr/Equipe1/JE\\_approches.htm](http://icar.univ-lyon2.fr/Equipe1/JE_approches.htm)) では、聞き手とのインタラクションと統語構造の関係について刺激的な議論が展開されました。そして、類型論のゼミでも通常の講義に加え、他大学から研究者を招き、ロシア語のアスペクトやクレオール語の時制体系など様々な言語に関する面白い講演会が頻繁に開催されました。

前期は *mini-mémoire* が課題とされました。例えば、統語論のゼミのテーマは、ラジオやテレビ番組の音声を文字化し、それをミクロ・マクロ統語論の観点から分析しました。そして、学期末に修士論文を提出し、その後、教授陣とゼミ生の立ち会いのもと口述試験にのぞみました。

授業の準備や論文の執筆の際に足繁く通ったのが大学図書館でした。図書館は開架式で主要なフランス言語学の雑誌が閲覧が可能で、データベースとして、*Delic* の作成した会話コーパス *Corpus de référence du français parlé* や大学のパソコンから *Frantexte* を利用することができます。

このように、研究環境に恵まれ、指導教授の *Deulofeu* 先生のあたたかいご指導をいただいたおかげで、充実した一年を過ごすことができました。

◆宮川宗之（パリ第13大学博士課程）

2010年9月より日仏共同博士課程の枠にてパリ第13大学の博士課程に登録し博士論文の準備をしています。共同博士課程の規定により筑波大学博士課程にも同時に在籍しており各々論文を執筆する予定です。パリ第13大学では *École doctorale sciences humaines et sociales Erasme* と *CNRS* 双方に属している *LDI*（*Lexiques, Dictionnaires, Informatique*）という研究所に所属しておりますが、博士課程の学生が15名程、また *Master 2* に相当する *Master Pro, Master Recherche* の学生、*Master 1* の学生を合わせると総勢でおよそ50名程にもなる大所

帯ではあります。幸い博士課程の学生は各自固定ポストを与えられておりまた指導教官も同じ研究所内に教官室がありますので、週1回の Salah Mejri 教授による figements に関するセミナーと併せ、指導を受けられず困ってしまうということにはなりません。所内に専用の bibliothèque がありますし必要な文献を司書の方に頼むことができますから、その意味でも研究環境は恵まれているといえます。研究所として定期発行している国際レビューとしてネオロジーに専門化した *Neologica*、語彙論一般として（とりわけ語彙と他の言語学的要素との関係、またそれに関連してコンピューターによる自然言語の自動処理における理論的アプローチ） *Cahiers de lexicologie* が在ります。また昨今行われたセミナーとしては、Georges Kleiber による “Sémantique proverbiale, proverbes, dénomination et métaphore”, Gabriel Bergougnoux による “Une recette pour dire les choses” などがあり、各々ことわざ的表現すなわち一種の凝結表現における意味論、日常の話し言葉の中の特定のジャンルにおける網羅的な記述について講演を行いました。対外的な活動としては3月に Journées des dictionnaires “D’un mot, d’un dictionnaire à l’autre analogie, synonyme, et jeux de mots” が行われ Alain Rey の列席のもと辞書学一般についてさまざまな発表が持たれ、また9月には Journées scientifiques LTT (Lexicologie, Terminologie, Traduction) が予定されています。4月にはパリ第4大学, CELTA (Centre de Linguistique Théorique et Appliquée) にて Journée d’étude “Proverbes, Stéréotypes et discours” が催され、Jean-Claude Anscombe “La détermination du sens des proverbes” や Salah Mejri “Proverbe et discours : les proverbes endophrasiques” が発表を行いました。

私自身に関しましてはフランス語がいわゆるフランコフォニー圏においてどのように受容されかつ変容していくのかという点に焦点を当てております。そのためにチュニジアにおいてコーパスを定め時系の変化と共に語彙の収集を行っておりますが、研究所の仲間たちが際立って多国籍であるために（メキシコ・チリ・キューバ・モロッコ・アルジェリア・チュニジア・イタリア・ギリシャ・ポーランド・中国・韓国）仮にそれが研究テーマに直接に影響はしないとしても視野を広げるためには非常に良い刺激を受けていると感謝しつつ留学生活を送っている状況です。

## 10. 「海外雑誌論文目録」廃止と海外雑誌リンクのHP上掲載について

1967年刊行の『フランス語学研究』第1号からほぼ毎号掲載されてきた「海外雑誌論文目録」は、昨

2010年刊行の第44号を最後として、廃止することが編集委員会で決定されました。したがって、本年刊行の第45号には「目録」はありません。

これまでの「目録」作成作業の要である早稲田大学（中央図書館）のご厚意に甘えるのには限度があること、雑誌の電子化に伴い早稲田大学で部外者が例外的閲覧をできる対象がどんどん減少していくこと、など技術的困難もありますが、なにより、インターネットのおかげで、私たちが誌上の「目録」で提供してきた情報を誰でも、より完全な形で、簡単に手に入れることができるようになったというのが、「目録」廃止の最大の理由です。

海外の雑誌を手にする、あるいは目にすることからそれほど容易ではなかった頃に作成された「目録」を前にすると、私たちの先輩の苦労と喜びが思われて感慨深いものがありますが、やはり世の中は完全に新しい時代に入ったと言わざるをえません。

『フランス語学研究』誌上（および学会HPのアーカイブ）での新規の「目録」掲載は廃止されますが、それを補う形で、これまで「目録」作成の対象となってきた海外雑誌約90誌のHPへのリンクと、各雑誌についての簡単な紹介コメントを、日本フランス語学会のHPに掲載します（6月頃予定）。ほとんどの雑誌で最新号およびバックナンバーの論文タイトルが見られますし、また、号単位や論文単位でオンライン購入が可能な雑誌も多くあります。さらに、数年前以前の号の論文がすべて無料公開になっているものもあります。これまでの「海外雑誌論文目録」に代わってこれらの材料を、みなさま方の研究や思索に資するものとして大いにご活用くださることを願っております。

（「目録・紹介」取りまとめ担当：六鹿豊）

## 11. 2010年度収支決算報告

(単位 円)

### 収入の部

会費	811,000
機関誌売上金	104,000
広告収入	90,000
預金利息	3,049
小計	1,008,049
前年度繰越金	4,480,161
計	5,488,210

### 支出の部

BELF44号印刷代金	987,147
BELF45号編集実費	20,000
ニューズレター印刷代金	18,848

発送費・通信費	69,937
特別発表(講演)謝礼	180,000
人件費	236,440
会場費	40,817
事務消耗品費	10,899
振込手数料	22,315
ホームページ管理費	7,430
雑費	28,750
小計	1,622,583
次年度繰越金	3,865,627
計	5,488,210

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金(三井住友銀行普通預金)	134,662
郵便貯金(普通)	288,506
(振替)	1,424,288
銀行預金(三井住友銀行定期預金)	2,000,000
現金	18,171
計	3,865,627

2011年3月31日

〒560-0043  
大阪府豊中市待兼山町1-8  
大阪大学大学院言語文化研究科内  
日本フランス語学会

## 12. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたってはいくつかの注意を守っていただきたいのですが、当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にあります。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。(不適切と思われる投稿に対しては、適宜管理グループから注意喚起を行ってききましたが、出来るだけそのような事をしなくてもいいように皆さんの適切な利用をお願いします。)

なお、以前はフリーメールのアドレスでは登録をお断りしていましたが、現在はフリーメールのアド

レスによる登録も受け付けています。また、アドレス変更、あるいは退会の際には旧アドレスの削除は各自でしていただくようお願いしていましたが、今後は管理グループで削除しますので、直接管理グループのアドレスまでご連絡ください。管理グループのアドレスは以下の通りです。frenchling-owner アットマーク yahoogroups.jp (frenchling 管理グループ)

## 13. 編集後記

3月11日の大地震にあわれた会員のみなさまに、こころよりお見まいを申しあげます。わたしの住んでいる東京でも、これまでに経験したことのない大きなゆれで、その後も停電、物資不足、そして事故をおこした福島原子力発電所が出す放射能の恐怖など、さまざまな混乱がうちつついております。勤務先の筑波大学も被害を受けましたが、もっと震源に近いところにおられる方々に対しては、「被害」ということさえ申しわけないほどでしかありません。しかしそれでさえ、精神的なショックは大きく、4月半ばまでは、「どうも調子がおかしい」という状態がつづきました。

4月23日の例会で、最近になく多くの参会者が集まり、活発な議論がなされました。また論文を書かなければ、という気になりました。思えば、フランス語学・言語学は、わたしにとっては以前から、現実世界でなにか問題があつて、はればれしくない気分ときでも、ひそかにかくしもっている釣りあい錘(contrepoids)のように、精神の平衡をとりもどすよすがになっていました。今回も同様でした。学問にも社会貢献がもとめられる昨今、そのような「僧院的」な考えではいけないとお叱りをいただくかもしれませんが、一方で、自分にとってだいじなものでなければ、それを世に問うことなどできないという思いもあります。今後もフランス語学会が、フランス語学を共有の宝(trésor commun)とする場でありつづけるよう、祈念いたします。

(渡邊淳也)

ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>